アドルノの「概念」論と社会学

——批判の対象としての概念、批判の媒体としての概念——

Consideration of Adorno's concept of "concept"

片 上 平 二 郎

KATAKAMI Heijiro

According to Adorno, "identity thinking" is the predominant mode of thinking in modern society. In this mode, the "subject" controls "others" through "instrumental reason". Adorno claims that the modern form of violence derives from the subject's mastery over the "object". Adorno defends the "non-identity thinking" and "non-identifiable" thing against "identity thinking". From this perspective, Adorno criticizes "positivism" in which "concepts" retain control over "objects." On the other hand, Adorno emphasizes that the "concept" has potentiality to grasp the essence of "non-identifiable" thing. There can be no thinking without conceptions. The purpose of this paper is to consider the dualism of Adorno's thesis on the "concept". While the concept is the "object" of criticalness, it is also the "medium" of thinking in critical theory. I would analyze Adorno's argument about the "concept" and examine his ambiguous attitude toward "modern reason".

1. 近代的理性と批判理論

アドルノは、近代的暴力の基本的な形態として道具主義的理性の問題を扱っている。近代的主体は、科学に代表される理性主義のもとで、他者や自然を利用可能な道具的存在として扱い、それらを自らの望むかたちに加工していく。自己保存の原理に基づいて、人間たちは、自分が望んだかたちに加工された世界を生きることが可能になる。

だが、そのことは同時に新たな経験を与えてくれる他者が消去された世界の中を生きることでもある。アドルノは、このようにして、他者なき同語反復の世界としての近代社会、すなわち「同一性」の暴力によって覆われた世界としての近代社会の存在を語っていく。すべてが有用性という基準の中で判断され、その結果、機能性という結びつきのみで構成された世界こそがアドルノが「同一性」を批判するに際して使用したある種の理念型である。この悲観的な世界像を通じて、異質な要素や新たな可能性が排除され、変化の可能性が失われた世界としての現代社会というイメージが語り出されていく。

このように「同一化」された世界の中では、「自己保存」という当初の目的自体もまた脅威にさらされることになる。「同一化」の暴力によって新たな質を持った出来事が生じる可能性が奪われることで、自己保存という目的は、自己が持つ潜在的な可能性を喪失するという帰結によって変わられることになる。ここには「自己保存」を目指したが故に生じる「自己破壊」という皮肉な事態が存在している。主観が対象に対して加えた呪いは「主観の上にも振り掛かって主観の呪縛となる」[Adorno 1997: 142=1996: 169] のだ。

アドルノは自らの思想の中で徹底的に「同一化」された世界とその世界を生きる「同一化」された近代的主体の姿を描き出した。アドルノにとって、現代社会とは「近代的理性」による「同一性」の暴力に覆い尽くされた世界として語らなければならないものであった。

アドルノはこのような「同一化」という性格を持った「近代的理性」の暴力性を批判す

るために、「非同一性」「非同一的なもの」というモチーフを重要視している。全体社会が強制する「同一性」の原理に対して、そこから排除されてしまう存在やそれらが自らの中に組み込むことが不可能な存在をとらえていこうとすることがアドルノが自身の思想的営為の中心にすえていた問題関心である。そして、この「非同一性」の思想とは、「主観」によって暴力をふるわれる側である「客観＝内容」の立場から哲学をとらえなおそうとすることを意味している。従来の哲学の中に存在してきた「主観の優位」という事態に対して、「客観の優位」という思想的立場をアドルノは『否定弁証法』の中で主張している。

だが、この思想的キーワードとして語られることも多い「非同一性」の思想というアドルノの立場は、本質的な部分で困難を抱え込んだものとしてある。なにかを思想的に言葉にして語るということはそもそもが「概念」という存在に「同一化」するという事態を通過しなければならない。つまり、“語る”ということ自体がそもそも「同一」的な性格を帯びた行為なのである。そのため、「同一化」され得ないものを語ろうとすること自体が矛盾を孕んだ試みになる。ここにアドルノの思想の持つむずかしさがある。

本稿では、アドルノのこのようなある種の矛盾を孕んだ部分もある思想について、「概念」という論点から考察してきたいと思う。「概念」とは、学問が“何か”について語るときを必ず使用しなければならないものである。しかし、「概念」を通じて何かを語った際、そこからこぼれ落ちてしまうものもどこかに存在している。「概念」とは、語られる「対象」にとって、自らにかたちを与えてくれるありがたいものでもあれば、自らを切り詰めていくような暴力的なものでもある。この「概念」という複雑な存在を「批判理論家」としてのアドルノがどのように論じていったのかを確認していきたい。

その際に着目してみたい1つの論点に、アドルノの思想の中で「社会学」という学問の占める位置という問題がある。たとえば、1931年の私講師就任講演である「哲学のアクチュアリティー」の中でアドルノは哲学にとって社会学が果たす役割について語っている。哲学が「思考の力で現実をあまねく全体として捉えることができるという幻想」をあきらめざるを得ない [Adorno 1973: 325=1987: 182] という時代状況への言及によってはじめられるこの講演の後半では、その困難を突破する1つの方向性として哲学的「概念」と社会学的「概念」の関係の問い直しが行われている⁽¹⁾。本論文では、アドルノの「概念」論を考察するに辺り、ここに見られるようなアドルノにおける「社会」、そして「社会学」という論点を重視しながら、アドルノの思想の姿を描き出していきたいと思う。

2. アドルノの「概念」論の二重性

アドルノは近代的な科学の中に、自らが扱いやすいように「客体」を加工していくという性質を見て取っている。ここには「理性」によって構成された世界観が、あらゆるものを「同一化」していく「物象化」という事態が存在している。

「物象化」は「概念」に対する「物心崇拜」 [Adorno 2003b: 43=2007: 46] というかたちで学問にも生じうる。何かを「把握 (begreifen)」するために生み出されたはずの「概念 (Begriff)」が、いつのまにか把握されるべき何かを呑み込み、その枠組に閉じ込めてしまうことは多々見受けられる事態だ。本来、「概念の基体」として、それが語ろうとする〈あるもの〉 (etwas) が存在しているはずだ。にもかかわらず、〈あるもの〉に対して「概念の優位」 [Adorno 1997: 139=1996: 164-165] という事態が起きてしまう。これはアドルノが近代的理性の暴力性の根源としてみた「客観」に対する「主観の優位」 [Adorno

1997: 48=1996: 51] という状況と同じ構造を有している。「主観は、ひとたび客観から徹底的に分離されてしまうと、その客観をすぐにおのれに還元してしまう。自分自身がどれほどまで一つの客観であるかを忘れてしまい、それを呑み込んでしまう」[Adorno 1969: 152] のだ。

このような議論を見ることで、アドルノの中にある「概念」への「批判」というスタンスを確認することができるだろう。このスタンスの中では、「近代的理性」による「同一化」する暴力の象徴として「概念」が扱われている。

しかし、一方でアドルノは思想や哲学において「概念」というものが持つ重要性も主張している。学問や思想が何かをとらえるためには必ず「概念」を経由しなければならない。「事物そのものと呼びうるものは事実的に（ポジティブに）直接眼前に存在してはいない。それを認識しようと思う者は……思考しなければならない」[Adorno 1997: 189=1996: 231] のであり、「思考は概念によって遂行されるということ」[Adorno 2003b: 38=2007: 41] をアドルノは強調する。よって、「非同一的」なものも「それ自体で肯定的なものとして直接手に入れることはできないし、否定的なものの否定によっても手に入れることができない」[Adorno 1997: 161=1996: 194] のであり、哲学においては「概念をつうじて非概念的なものに付き従うこと、それがなされなければならない」[Adorno 2003b: 217=2007: 218] のだ。

そして、この「非同一的なもの」と「概念」の間の関係を意識しないと、「非概念的なもの」や「非同一的なもの」という「概念」がかえって物象化されてしまう危険性が生じることがアドルノは警戒する。直接、それらを「概念」抜きで「模写」しようとするものの「非反省性」は神秘主義的にそれらを描き出すことをしてしまう。「模写する思考などというものは、反省なき思考であり、非弁証法的矛盾である。反省なくしてはいかなる理論もない」[Adorno 1997: 206=1996: 252] とアドルノは述べている。

つまり、アドルノの思想においては「非概念的なもの」を考えるために、再度、「概念」というものの意味自体を考察し、「非概念的なもの」との関係性の中でそれをとらえなおすことが重要な問題として存在している。アドルノは「わたしたちは哲学において、概念によってまた概念について語らねばならない」[Adorno 2003b: 95=2007: 109] と語りながら、「概念」という論点に対する思索を深めていく態度を表明している。ここには「概念」というものを「批判」の媒体」として見るアドルノのもう1つの態度が存在している。

アドルノは「概念」に対する「反省」的考察を行いながらも、その「反省」をもたらすものとしての「概念」の力を重要視してもいる。「概念によって概念を超え出ようとする努力こそが、哲学の仕事なのである」[Adorno 1997: 27=1996: 24] とアドルノは述べる。

つまり、アドルノの思想の中には、「概念」というものに対する二重の態度が存在している。1つは「概念」に対する批判的態度であり、もう1つは批判を可能にする「媒体」として「概念」を肯定的に評価する態度である。ここに単なる「理性」や「近代」に対する批判者としての姿だけではなく、それらが持っている潜在的な可能性を強く信じる「理性」主義者や「近代」主義者としてのアドルノの姿を見て取ることが可能であるだろう。このようなアドルノの複雑な「概念」論を、批判的側面、肯定的側面の双方から見ていくことで、アドルノの思想の構造をとらえていくことがこの論文の目的である。

3. 実証主義における概念の使用法 ——アドルノの「概念」批判——

アドルノは学問や科学が持つ「概念」を秩序正しく一貫したかたちで「整理」しようとする性格について次のように批判的に論及している。

合理的科学は、自分が真理の権限者であると思い込んでいるが、実は、自分自身が勝手につくった秩序概念のためや、自分が内在的に無矛盾でありかつ実用的になるために、制度としての「既成の（ポジティブな）」諸学科にびったり合致するまで、対象をあらかじめ調整し、刈り込んでいる……。科学が事物の生命を意に介せず、だが事物がこの科学自身のルールに合うかどうかばかりを気にしている事態、これがヘーゲルの物象化の概念を生み出している動機である [Adorno 1974: 70=2006: 143]

「概念」による「対象」の整序とは、学問における制度的な見方に合致するようなかたちにまで「対象」を切り詰めることでもある。「概念には……秩序を創り出す不変者であるという自負が存在する」[Adorno 1997: 156=1996: 188] が、この自負こそが“「概念」の優位”という事態を生み出すものなのである。「個別科学というものは、自分の対象や対象領域がどういうものかろくに考えもせず、これらと認識との関係を独断的に規格化している」[Adorno 1974: 92=2006: 190] ようにアドルノには感じられた。

そして、ここに「概念」というものの論理的「同一性」に基づいた「同一性」原理の実体化 [Adorno 1997: 156=1996: 188] が生じる。科学における論理構造が「対象」に押し付けられることで、「対象」は科学が持つ認識枠組の中に吸収されてしまう。

科学は清潔で明瞭な概念を誇りとしている。そしてこうした概念を操作するために、その意味を固定しておき、その上で、これらの概念が言おうとしている事物の生命はこうして固定された概念では言い尽くせないという事実を考慮することなしに判断を行っている [Adorno 1974: 66=2006: 136]

つまり、学問への「同一化」の中で「対象」の「非同一的」な要素が奪われていってしまう。「対象」の「内容」や「質的なもの」が「科学」という制度的なものによって剥ぎ取られてしまうという事態がここには存在している。

このような科学的な「概念整理」は一見、「客観的」なものに見えるかもしれないが、アドルノの視座からすれば、あくまで「科学自身が生み出している客観性は主観的なものにすぎない」[Adorno 1974: 70=2006: 143]。このような科学観の中では、「客体」に対して「主観」による「同一化」の暴力が加えられているのであって、「概念」が「対象」を「物象化」させてしまっている。このような事態こそが、アドルノが「実証主義論争」の中などで、「実証主義」というものに対して批判を加える理由となったものである。

そして、このようなかたちで「概念化」されることによって、「対象」は動態性を失ってしまう。「同一性」を変化に導くような「非同一的な」要素が消し去られてしまうのだ。

対象というものを、すべての主観的総合にその必然的条件として先行する単なる質料へ還元することとは、対象からその固有の力動性を吸い取ってしまうことになる。対象は、質を剥奪されたものとして静止させられ、一般に運動が述語として与えられるようなものを奪われてしまう [Adorno 1997: 98=1996: 113]

「概念」というものへの「同一化」は、「対象」が変化していく可能性を奪うことがある。

だからこそ、アドルノは安易に「実証主義」が自らの調査結果を「事実」として提示することにも批判的である。それが「事実」であると語るとはそれが変化しえない「普遍的」なものであるという見方を生み出し事態を肯定する。アドルノが「現在の社会学の偶像と化している」とも語る「事実という概念」は「そもそも時間を欠いたものとして、点的な現在という姿で示される、という特徴を有して」[Adorno 2003a: 248=2001: 255] いた。

このようにして、「概念」が無時間的な存在として扱われ、「中立的な存在」となってしまうことをアドルノは“ゲームのチップ”という比喻を用いて次のように語っている。

概念をたんなるゲームのチップ、たとえそこで表されている事態の省略記号として用いられてもそれ自体はどんな自立性も認められないゲームのチップに還元しようと努力したりそれが可能だと考えるのは、はなはだ愚かなことです [Adorno 2003a: 136=2001: 140]

当然、ここで語られる「チップ」とは資本主義社会下における「貨幣」の比喻でもある。「現在は、市場の厳命を受けたコミュニケーションが言語に弾圧を加えている。その症候は、コミュニケーション理論が言語理論にとって代わったことである」[Adorno 1974: 98=2006: 202] と語り、アドルノは、言語行為やコミュニケーション行為が市場的な等価交換原理的性格を要求され平板化される事態を指摘しているが、このような事態は学問や科学、哲学においても無縁な話ではない。学問において使われる言葉もまた、「製品のどこにも人間の痕跡があってはならぬ」という市場の特異体質的厳命 [Adorno 1974: 115=2006: 239] を受けて「物象化」されていく。ここには「中立化した商品」を扱う市場と似た姿をとる実証的な科学というアドルノの見方が存在している。「社会」が「商品」を扱うのと類似した手つきで「概念」を扱う「実証主義」に対して、アドルノは批判を行っている。

多なるもの（＝他なるもの）を「同一性」原理によって排除していく「社会」においては、「概念」もそれと同様の排除を行っていく。学問が行ってしまう極度の抽象化とは、「社会」それ自体が行う抽象化の似姿であり反映なのである。「ここでは社会学者の抽象化する思考のなかに抽象作用があるのではなく、社会そのもののなかにそのような抽象作用が潜んでいるのです」[Adorno 2003a: 59=2001: 61] とアドルノは語っている。このような場合、学問は「社会の下働き役の理論」[Adorno 1979: 232=1970: 234] になってしまう。

アドルノから見れば、「実証主義」的な学問が自らの学問的な整序を成功できたと思ってしまうことは、実際には、それが成功可能なような「同一化」された「社会」が生まれ出てしまっているということを意味している。「社会理論の正しさを実証する個々の証拠が、それ自体すでに、社会理論が打破しようとする幻惑連関に属している」[Adorno 1979: 198=1970: 182] のであって、その成功は素直に喜ぶべきことではない。同語反復的世界の中で自らの予想を当てる同語反復的科学という図式によってアドルノは「実証主義」に批判的考察を加えていく。アドルノから見れば、「実証主義」とは「実証」という意味とともに、「社会肯定」という意味でもポジティブなものでもある。

アドルノは等価交換原理という「同一性」の原理によって覆われてしまった現代社会の中で、学問が使用する「概念」もまた“A=A”という同語反復の構造にとらわれ「同一性」の内に閉じてしまうことを批判した。世界の「同一化」を弁護し、促進するような機能を

近代社会下における学問や哲学は持ってしまいかねない。

4. 概念と社会理論 ——「概念」的存在としての「社会」——

しかし、アドルノはそのような理由から単純に「概念」の放棄を主張するわけではない。2 節でも確認したように、アドルノは思考における「概念」というものが持つ重要性、そして「非概念」的なものを単純に語ることの危うさをさまざまな場所で強調している。

「直接性」なるものを素朴に語ることはあまりに安易であり、それがすでに「直接性」という「概念」によって媒介された行為であることをアドルノは論じる。「いかなる哲学といえども、なまの事実を引きずり出して提示してみせることはできない」[Adorno 1997: 23=1996: 18] のであって、そのことを見ないことは「媒介」なるものが持つ大きな力のかえって意識から外させてしまうことになってしまう。

アドルノは「社会」の中に存在する限り、あらゆる事物や出来事が「社会」という存在に媒介されて存在せざるを得ないことを強調する。「社会的労働とまったく無関係に独立しているものは何一つ存在しないという経験」[Adorno 1974: 66=2006: 134] が重視されるべきであり、「個々の現象を説明する試みはすべて、社会構造といったものにすぐに行き着くということ、一般に考えられているよりもずっと早い段階で行き着く」[Adorno 2003a: 87-88=2001: 91]。つまり「社会によって媒介されていないものは何一つとして存在していない」[Adorno 2003a: 112=2001: 115] とアドルノは考えている。あらゆる事物や出来事が持つ「社会」的な被媒介性という問題をアドルノは重要視する。

学問や思想が「直接性」なるものを安易に想定することは、この「社会」的媒介性を人々に見落とさせるイデオロギー的なものになってしまう危険を持っている。「具体的なものという概念がこうむってきた奇妙な情動的な備給（感情的な支配）」[Adorno 2003a: 86=2001: 90] は再考されるべき問題としてある。アドルノは「直接性」や「具体性」なる言葉が隠し持つ被媒介性をあらわにするための道具として「概念」の意義を主張する。事物の被媒介性をあらわにし、そのことで「社会」という存在に目を向けていくことは批判理論的に大きな意味を持つものである。

そして、この「社会」というものの自体がそもそも「概念」的存在であることを、「1 つの客観性としての社会の中にはすでに「概念」のようなものが潜んでいるのです」[Adorno 2003a: 59=2001: 62] と語ることでアドルノは表現しようとしている。「人類の運命を展開する法則は、交換の法則である」が、「それはしかし、それ自体けっしてたんに直接的なものではなくて、概念的なものである」[Adorno 1979: 209=1970: 198]。つまり、ゲゼルシャフト的な交換関係はあらゆるものを抽象化していくが、同時に交換を支える「社会」もまた抽象的な存在なのである。そのような抽象的な原理を根本に持つ「社会は、精神が本質的に概念であるのと同じように、本質的に概念なのである」[Adorno 1974: 25=2006: 47]。

アドルノの議論によれば、この「概念」的存在である「社会」は、どれだけ個別的な社会現象を足し合わせたとしても、それだけでは到達できないものであるとされる。「社会における本質と現象との間」には「質的飛躍」があり [Adorno 1979: 315=1992: 41]、「社会」という概念に到達するためには「経験だけでは不十分である」[Institute für Sozialforschung 1956=1983: 117]⁽²⁾。さまざまな個別的な事象が組み合わさった結果、個別のものが単に並列されただけの集合では持ち得ない複雑な性格が「社会」には存在する

ようになる。

そのため、「社会学」研究はたとえ論件先取になったとしても、個別の現象とは別のレベルの「社会」なる「本質概念」を設定することをしなければならない。「社会学」では「全体を先取することなしには、どんな個々の観察もその位置価を見出すことはできない」[Adorno 1979: 549=1992: 131] とアドルノは考えた。よって、「社会科学は、自然科学のように部分から全体に進んでいくものではない」[Adorno 1979: 210=1970: 200] のであり、「社会」という全体概念から部分的な事象をとらえる部分を持たざるを得ない。

アドルノの見るところ、総体的な「社会」概念を思弁的にとらえようとする「社会の理論」と、個別事象に対する経験的な「社会調査」の間には埋めることができない亀裂が存在している (Institute für Sozialforschung 1956=1983: 118]。だが、「この亀裂は隠蔽すべきではない」 (Institute für Sozialforschung 1956=1983: II]。この2つの系列の研究から導き出される2つの「社会」像の間の亀裂こそが、「社会」を考察する際にもっとも重要なものとなるということすらできるであろう。

「社会」という存在は、徹底的に抽象的なものでありながらも、同時に具体的な実在性を持つ“奇妙な”存在である。この“奇妙な”存在を考察するには、「社会」という「概念」を用いてそれを語るしかないアドルノは考えた。抽象的な「概念」を用いた哲学的な思弁性が、抽象的な交換原理によって構成された「社会」という場を論ずるためには必要となってくる。このような視座から、アドルノは「社会」というものを「概念」的に考察する学問として、思弁的なレベルでの「社会哲学」的な議論や「社会理論」的な思考法の必要性、必然性を語っている。

5. 概念の機能転換

前節で確認したように、アドルノは批判理論における「概念」的思考の必要性を主張している。ただしアドルノはこのことについて「概念を操作しなければならないという哲学の災いを、概念の優位性に転じてはならない」[Adorno 1997: 23=1996: 18] とし、思考を「主観」の“恣意的な”「概念」使用に委ねてはならないということを強く主張している。

そのために「対象と対象自身の概念を不断に対決させる」弁証法 [Adorno 1974: 16=2006: 28] という視座が重要なものとなってくる。「肝心なのは限定的否定、すなわち、概念を対象と、また逆に対象を概念と付き合わせる内在的な批判」[Adorno 2003b: 40=2007: 42] であり、そこから「方法と内容の相互関係を考えること」[Adorno 2003b: 15=2007: 14] が必要となってくる。

理論は、それがいわば外から持ち込んだ諸概念を、自体がみずから備えている諸概念に、事態がみずから求めているものに、置き換えなければならぬ。そして事態そのものと対決させねばならぬ。理論は、今日ここに固定している対象の硬直性を解きほぐして、可能性と現実性との緊張関係に放たなければならぬ [Adorno 1979: 197=1970: 181]

そして、その際には「概念における矛盾という観念」が持つ意味 [Adorno 2003b: 17=2007: 17] が重要なものとなってくる。「概念」の中には「概念」が排除してきたものの痕跡が残っている。これらの痕跡は「概念」にとって矛盾したものとして存在している。この矛盾に基づいて「概念」を「対象」との関係の中で考えることで、「非同一的なもの」の存在とその痕跡が見えてくるとアドルノは考えている。

そして、「非同一的なもの」を「概念」の中に見ることは、「同一性」が「非同一的なもの」に行使した暴力を見ることでもあるということをアドルノは次のように述べている。

同一化する思想は、実際、同一化をつうじてあらゆる個々の概念に暴力を行使します。そして、否定の否定とは、元来この暴力の＜アナムネーシス＞（想起）にほかなりません [Adorno 2003b: 51=2007: 56]

このような自らの暴力性の想起に基づき、思考の中に「反省」という契機が芽生え、そこから「同一性」の原理の解体可能性があらわれてくることになる。「概念」に対する徹底した考察はそれ自身の閉鎖性を打ち崩す可能性を持つ。そこから「概念が自分の概念としての本質によって自分および自分の向かう対象の周囲に立てている壁を、まさしくこの解きほぐしを通じて打ち壊すこと」[Adorno 2003b: 96=2007: 110] が目指される。このような「反省」的契機によって、「概念」はみずからの動態性をとりもどすことが可能になる。このような「弁証法」がもたらす「反省」の効果をアドルノは以下のように語っている。

弁証法とは、客観的には同一性の強圧を、その内に蓄積されさまざまな対象化した姿で凝固しているエネルギーによって粉碎することを意味する [Adorno 1997: 159=1996: 192]

このようにして「概念」は動態性を獲得するとともに、その「運動」によって「概念」自身の「自己同一性」からの解放が可能になる。「概念」は自らの「非同一化」を通じて、「非同一性」「他者」といった「自分の反対物、非概念的なもののほうへと動いてゆく」[Adorno 2003b: 17=2007: 16] のである。

アドルノが「否定弁証法」と名付けた思考法は、このような「概念」の機能が転換された地点から行われるものである。アドルノは『否定弁証法』の中で、この思考法が持つ「同一性」に対する批判的意義を次のようにまとめている。

概念性のこの方向を変え、概念性を非同一的なものへ向けるものこそ、否定弁証法という蝶番いなのである。概念のうちなる非概念的なもののもつ構成的性格を洞察すれば、概念がこうして手間のかかる反省なしにとまっている同一性の強迫も砕け散ってしまうことになる。概念の自己省察は、意味の統一体としての概念があたかもそれ自体で存在しているかに見える仮象から脱して、おのれ自身の意味へと向かうことになる [Adorno 1997: 24=1996: 20]

そして、このような「概念」の自己反省は、「概念」の変化だけでなく「対象」それ自体の変化にも結びつくものである。「概念」が運動しはじめるとともに、それが語ろうとしていた「対象」も動態性を獲得する。この反省は「対象に賛成すると同時に反対している」のであり、「対象を本当の姿にするのだし、他方、この力は、対象がまだ本当の姿に達していないことを思い出させる」[Adorno 1974: 76=2006: 155] ようなものとしてある。

「概念」の変化とは、同時にそれがとらえようとする「対象」にも変化を与えるものである。「概念」は自らが新たな可能性を獲得するとともに、「対象」に対しても新たな可能性を与えるようになる。「概念」と「対象」は互いに「弁証法」的に影響を及ぼせあいながら、それぞれが新たな変革可能性を持つようになりはじめる。

そして、個別のカテゴリーが変化していくことによって、全体の布置連関のあり方も変化していく可能性を獲得するようになる。「あるカテゴリーが変わると一否定弁証法によって、同一性と全体性のカテゴリーも含め一あらゆるカテゴリーの布置状況が変わり、それにつれて各カテゴリーもそれぞれ変わる」[Adorno 1997: 169=1996: 204] とアドルノ

は語っている。部分が「同一性」の原理を打ち破り動態性を獲得することで、その他のカテゴリー、そして、全体的な配置関係が姿を変える可能性もあらわれではじめる。

アドルノはこのようにして「概念」に対する態度を変えることで現れ出てくる「社会」への批判的可能性の萌芽を語ろうとする。「主観の自己反省は、本当は、社会がおのれ自身を批判的に意識しはじめる、その最初の曙光なのである」[Adorno 1974: 71=2006: 145]。

「概念」は本質的に「対象」と「同一的」ではありえない。「概念は、それが包摂している当の諸要素よりも、つねに同時によりわずかでもあれば同時により以上でもある、という」[Adorno 2003b: 18=2007: 18] 存在である。「概念」はそれが語ろうとする「対象」を切り詰めることがあるが、同時に、それがいまだ保持し得ていないさまざまな潜在的な可能性を語り得ることもある。ここに見る「概念」と「対象」の関係には“揺れ”がある。このような“揺れ”を利用することで、「概念」を変化させていくと同時に、「対象」に対しても変化を加えていくことが可能になるとアドルノは考えていた。

アドルノはこのような問題関心に則って、「概念」と複雑な関わりをしなければならない「哲学」という学問について論じている。「非同一的なもの」の力動性を、言語という媒体によって表現するという困難なことを行わなければならないと考えるアドルノは「概念と労働の酷使」[Adorno 1974: 115=2006: 239] とでも言うべき“難解な”文体の採用という文章スタイルへのこだわりを見せている。ある意味で不可能なものとも言える「非同一性」を表現しうる「概念」の模索についてアドルノは次のように論じている。

哲学というものは……語りえないものをなんとか語ろうとする努力であると定義できないだろうか。言いかえると、一方で現実がいつもそれを同一化してしまうのに、非同一的なものに手を貸して、なんとかそれを表現しようとする努力だと定義できないだろうか。……哲学が求めることは本質的に不可能なことである [Adorno 1974: 94=2006: 195]

そもそも、言語という静的なもので動態的な運動を語るということ自体がある意味で不可能な行いである。そのため、アドルノは「芸術」をモデルとした「哲学」的思考というものについて考察しはじめる。特に芸術理論において「対象」をとらえようとした際に語られるミメシス（模倣）的契機の哲学への導入が語られる。「哲学はこれまで、概念という媒質のうちで、この概念に追放されたミメシスを救出したいと思ったとき、すべて芸術と手を組んだ」[Adorno 1974: 112=2006: 233] とアドルノは述べながら、「美学」的なものの導入によって、哲学における「概念」についての困難を乗り越えようとしている。

アドルノは「哲学の不可能性」という問題の解決に際して、「美的なもの」の導入の重要性を主張している。だが、ここに至って、アドルノの議論を美学的なものへの“逃避”や美的エリート主義として読み取る批判的立場や、もしくはいわゆる「否定神学」的なものとして読み取る立場が正しい可能性が生じてしまう。アドルノの「哲学」と「美学」の融合というプロジェクトはある種の魅力を持っているが、現実的に考えた場合、どこかでユートピア的なものになってしまうざるをえない側面を持っている。

6. 「社会学」における「概念」——もう1つの方法としての「社会学」——

だが、アドルノは、もう1種類、「美的なもの」と「哲学」結びつけるのとはまったく

ちがったかたちで自らと「概念」との関係性を再構築しようとしている学問があることを論じている。その学問とは「社会学」である。

彼は「私を社会学に引き寄せ、社会学に取り組ませた、とにかく私にとっての決定的な動機」として、「何らかの出来合いの、案出された、したがって拘束力をもたない概念に取り組むのではなく、そこにおいて概念が生じてくるもの、規範もまた生じてくるもの、またそこにおいて規範と現実が関係しあっているもの、そうしたものに概念を直面したいという欲求」[Adorno 2003a: 203=2001: 208] を「社会学」に感じたことをあげている。

「社会学」という「社会的現実」を扱おうとする学問は、それを語るに際し、「概念」というものに対して独特の注意の仕方を要求するものである。人間が日々を生きる「社会」という場における出来事を語ろうとする「社会学」では、「概念」という問題が重要な論点とならざるをえない。だからこそ、「社会学」においては、物理学や法学のような「ほとんど好き放題のと言いたくなるくらいの、自足的な概念のあり方」とは違った「たんなる概念で作られた社会理解に対する反省によって」[Adorno 2003a: 203=2001: 208] 抜け出そうとする欲求が必要とされる。アドルノにとって、「社会学」とは自らが用いる「概念」を「対象」との関係から徹底的にとらえなおそうとする学問としてあった。

そもそものこのような「社会学」の性格は、扱うべき「対象」との距離感が多くの他の学問とは違ったものであることに由来するものである。「自然諸科学とは異なって、客体を内側から理解することが社会学では可能であると考えられてきたこと」[Adorno 2003a: 229=2001: 235] はきわめて大きな意味を持っている。このような「対象」との関係性から、「社会学の方法はその対象との生きた関係の中に置かれなければならない」、可能な限り対象の側から展開されなければならない」[Adorno 2003a: 123=2001: 128] のであり、「概念」を「対象」との関係から「反省的」ととらえようとする態度が要求されることとなる。

同時にそのような「対象」との反省的な関係性は「社会学」に自己反省的な問い直しを要求するものでもある。「社会学は主体としての自分自身を同時に客体とする学問である」[Adorno 2003a: 229=2001: 235] と考えるアドルノは、「社会学」と「社会」の関係をつねに視野に入れておく必要性も考えている。

「社会学」とは実際に自らの「研究対象」との関係の中で「概念」をつくらざるをえないために、「概念」という存在を慎重に扱わなければならない宿命を持った学問としてアドルノには感じられた。「経験」的な研究と「理論」的な研究が“奇妙な”かたちで絡み合った学問である「社会学」においては、ある種のキマイラ的な要素やドンキホーテ的な要素 [Adorno 2003a: 136=2001: 140] が要求される。「社会学」は、「対象」や「素材」との関係の中で、自らがつくりあげた「概念」についてさまざまな反省を加えながら、その都度その都度の研究実践の中で実験的に「概念」と関わっていかざるをえない。使用される「概念」は研究以前に確固としたかたちで存在しているわけではなく、その過程で絶えざる思索や修正とともに姿を変えていくものとしてある。ここに「社会学」の「経験」的科学にも「思弁」的哲学にも単純には収まらない“奇妙な”性格が存在している⁽³⁾。

アドルノは「社会学」における「概念」との“奇妙な”関わり方の1例として、『社会学講義』の第14回の中でマックス・ヴェーバーの「理念型」について論じている。ヴェーバーにおける「理念型」とは、学問的道具として「理念的」に構成されたものであり、自覚的に、語るべき「対象」とは別のレベルで作り出された存在である。このような

「理念型」という「概念」は、アドルノが批判したような「対象」に対する優位性を持ってしまう危険性がある。にもかかわらず、「理念型」には「元来期待されていたよりも遙かに多くの実体性が帰されてしまっている」[Adorno 2003a: 204=2001: 209] とアドルノは論じている。

アドルノがここで参照するのは、『支配の社会学』においてヴェーバーが展開した「カリスマ的支配」への「伝統的支配」からの移行に関する議論である。アドルノはこの議論の中で、原理的には存在してはならないような「動態性」という要素が「理念型」の中に入りこんでしまっていることを指摘している。静的な存在であることが義務付けられた「理念型」という「概念」の中に「歴史的变化」という動態的な要素が存在しているのだ。

モナド論的に閉じた、絶対的に孤立した理念型の構造が、そのことによって揺さぶられるだけでなく、そもそもその際すでに社会の運動法則といったような概念もまた導入され、したがってウェーバーが彼の認識論のあり方からして元来原理的に否定していた、社会それ自体の客観的構造といったようなものも導入されていることになる [Adorno 2003a: 207=2001: 212]

ここには、「概念」の具象化 (Vergegenständlichung) という事態が生じている。

アドルノは、「対象」なるものが、「思索」による構成体である「理念型」の中にも意図しないかたちで入り込んでいることを強調する。「ひとたび素材にのめり込んだ瞬間……、いくら学問について実証主義的な考えをもっていたとしても、人は、そうした考えとはまっこうから対立する……一種の具象化を目にすることになるでしょう」[Adorno 2003a: 208=2001: 213] という言葉を語りながら、アドルノは、モンゴルの支配者の具体的なイメージが「理念型」を抽象的な「同一性」の次元から具象性へと引き寄せている様子を論じている。なんらかの現実的な出来事を語ろうとする行為の中にはどこかでその語られる「対象」の存在が入りこんでしまう。

純粋に道具として定義された概念を扱うときでさえも、いわば事柄そのものの構造化、客体のうちなる構造化が自らの存在を主張するという、つまり、操作のために定義されたそれらの概念において、客観的構造のいくらかが、それに固有の構造上の規定性をとおして、自らの存在を主張するということです [Adorno 2003a: 208=2001: 212-213]

ここには、社会的現実にせまろうという強い欲求を持った「社会学」という学問だからこそ可能になった「概念」の「具象性」の獲得という出来事が存在している。

アドルノは「社会学」の中に、「美学」や「哲学」の場合とは違ったかたちでの「対象」と「概念」の関係性を見出そうとした。アドルノにとって、「社会学」とは、「概念」という存在の持つアポリアについて、実践性を伴ったかたちで思索を行う学問として存在していた。アドルノの眼には、「理性」的思考法の2つの異なったかたちでの結晶形態である哲学的思索性と科学的実証性とが、「近代」という時代枠組の中で複雑に絡み合って生まれた“奇妙な”学、そして、ドンキホーテ的なある種の“無謀さ”を持った学として、「社会学」の姿が見えていた。「美学」や「哲学」といった既存の枠組を横断的に思考したアドルノという思想家が、「社会学」の中にそれらの学問には存在しない別種の魅力を感じていたことは、現在の「社会学」という学問の状況を考察するためにも確認しておくべきことであるだろう。この事実は、「近代」という時代の中で生み出された「社会学」という学問が、宿命的に大きな困難を持ち合わせてしまっていること、そして同時に新たな学問地平を切り開く可能性を持っていることの双方をあらわしているものと思われる。

注

- (1) そこでは、扉を開くに際し、鍵穴に対して“あまりに大きすぎる”鍵を生み出してしまった観念論的哲学に対して、事実とにこだわりすぎる社会学が生み出した「概念」は逆に“小さすぎる”という比喻を通じて、アドルノが感じていた当時の学問状況が語られている [Adorno 1973: 340=1987: 194]。
- (2) この本は社会研究所によるテキストであり、執筆箇所がどのように分担されているのかわからないが、アドルノの他の論点との重複が多いことから本論文においても引用の対象とした。
- (3) ただし、このような問題関心を強く読み取ることができるのは学説史的な古典の中のみであるという指摘をアドルノは行ってもいる [Adorno 2003a: 166=2001: 172]。さらに、当時の状況として、“遅れてきた学問”としてのコンプレックスから、早急に“自らの学問らしさ”“科学性”を証明しようとしてこの要素を排除してしまう社会学の姿が語られてもいる [Adorno 2003a :211=2001: 216]。

文献

Adorno, Theodor W. 1969 Stichworte. Suhrkamp.

—— 1973 Philosophische Frühschriften. Suhrkamp. 大貫敦子（訳）「哲学のアクチュアリティー」『現代思想』15(13): 182–197 青土社 1987.

—— 1974 Drei Studien zu Hegel. Suhrkamp. 渡部祐邦（訳）『三つのヘーゲル研究』筑摩書房 2006.

—— 1979 Soziologische Schriften I. Suhrkamp. 三光長治・市村仁（訳）『ゾチオロギカ』イザラ書房 1970. 城塚登・浜井修・遠藤克彦（訳）『社会科学の論理』河出書房新社 1992.

—— 1997 Negative Dialektik. Suhrkamp. 木田元・徳永恂・渡辺祐邦・三島憲一・須田朗・宮武昭（訳）『否定弁証法』作品社 1996.

—— 2003a Einleitung in die Soziologie. Suhrkamp. 河原理・太寿堂真・高安啓介・細見和之（訳）『社会学講義』作品社 2001.

—— 2003b Vorlesung über Negative Dialektik. Suhrkamp. 細見和之・河原理・高安啓介（訳）『否定弁証法講義』作品社 2007.

Institute für Sozialforschung. 1956 Soziologische Exkurse. Europäische Velagsanstalt. 山本鎮雄（訳）『現代社会学の位相』恒星社厚生閣 1983.

(立教大学文学部助教 hglo2hglo@ybb.ne.jp)